

の後で入営した弟の春夫は昭和十九年一月、広島島の船舶砲兵隊に入隊、同年十月、比島方面において戦死との公報がきましたが、船舶隊でしたからもちろん、遺骨も帰ってきませんでした。父は建設業をやっていたが、戦後のことで仕事もなく、私は出雲市の工務店に入社し三十三年間勤め、現在は退職しています。

思えば工作兵であったので、「雲鷹」轟沈のとき、材木を持って上甲板にいたので助かった。海に漂流中役に付いていたので早く救助された。戦争末期には日本海付近にいたし、復員業務たる輸送任務に数ヶ月間ついていたが、敷設水雷に接触もせず帰還者を無事内地へ送り届けることができました。

満四年間の海軍生活、南洋、馬來、台湾と航海勤務をし、多くの戦友を失っているにもかかわらず、復員の会社勤務を終え、元気で生活できたことは幸せであり、亡き戦没者の御冥福を祈っております。

## 海上護衛駆逐艦勤務 奇跡的な生還

山形県 菊地 清一

昭和十九年の夏の盛り、大東亜戦争も終わりに近いころです。半ば強制的に軍人志願を強いられて、私も海軍志願検査に合格、年齢は十八歳でした。私は機関兵として、同僚十一人は水兵科として舞鶴海兵団に入団しました。親元を離れ、お国のためとはいいながら、旅立つ我が子に親も辛い思いで送り出してくれたと思います。

入団一週間前のこと、秋の取り入れもぼつぼつ始めていたが、村役場の兵事係の方が、「採用通知書」を持ってきて「おめでとう」と言われる。まさかと思いましたが、やっぱり来た来た。隣のK君にも来た。上のだれにも来たと、兵事係の方が、さも嬉しそうにし

て出ていった。その後姿が、いまいましく今も思い出します。

翌日から「K君」と八幡様、神様、仏様と様の付く神仏に手を合わせた。武運長久を祈願し、夜は夜でK君宅にて語り合う。何しろ昭和十八年高等小学校卒の十六歳と私が十八歳（数え歳）、現在の高校二年、K君は一人息子で多少過保護に育ったような外見の持ち主でした。親たちは戦争に行けば必ず死ぬと思っていたような感じでした。

いよいよ明日出発という日まで喜び勇んでいても、いざ出発となれば、屠場に引かれて行く子羊のごとく振り返り振り返り家を見ながら重い足取りで離れ行く。乳離れした子牛が親牛から引き離されるような思いか、泣いている親を見て私も涙しました。いよいよ出発、列車の窓から半身を乗り出し万歳万歳、送る人送られる人、泣きの涙で無情にも発車。K君を見れば目を赤くして駅の方向を見たままである。途中二、三の駅を過ぎては泣き止まず、言わず語らず一昼夜、東舞鶴に到着して諦めたか寂しそうな笑顔が見られ少々安心。

ここで各兵科ごとに別れ、私は機関科、K君は水兵科、明日から厳しい新兵教育の始まりです。そして入団。毎日毎日の猛訓練に耐えて新兵教育終了、同時に一等機関兵を拝命し、少しは海軍軍人らしくなってきた心算でした。

一月も半ばかり、工機学校入校の準備中、転勤命令で同僚二名と呉軍港に停泊中の駆逐艦に乗り込み、艦隊勤務となりました。

一、艦隊名 第〇〇駆逐隊〇〇特攻隊

一、隻数 駆逐艦 四隻

一、屯数 一、〇〇〇屯

速度二十八ノット（約五十キロ位）

一、戦闘装備 対空戦闘 高射砲二門

機銃二連装 十基位

対潜水艦 機雷く爆雷

対艦船 魚雷

当時としては最大の戦力だと聞かされていました。

乗員は士官以下全員志願兵でした。上司にはソロモン海戦、ミッドウェー海戦、その付近の海戦での生き残

りが十何人も同乗していました。同僚に聞いたら北方カムチャツカらしいという。また別の人は南方らしいとも言ふ。出港して何日かして時折波の彼方に一万トシンくらいの貨物船らしい船が三隻見えてきた。そのとき、始めて輸送船の護衛らしいと同僚と語り合つた。

航海中は二直配置、戦闘になれば総員配置、全員が各部署に走り、私ら機関兵は手拭と糸クズ一握り持つて機関室に走り込み次の指令を待つのである（糸クズは船内にて蒸気噴射のとき、手拭で顔をつつみ、糸クズは口中に入れる）。航海中も昼夜の区別なく訓練の連続である。血の出るような演習、我らには月日時間の感覚などない。しかし、食糧は十分で空腹を感じたことは一度もない、助かりました。

このころは大分気温も高くなり、大分南の方にきた感じですが。今日も朝からの演習の最中に「戦闘配置に付け、対空戦闘」、私らが乗船して初めての対空戦闘。初めのうちは演習かと思つていたが、どうも本物らしいので部署に急走、この間に甲板では砲員機銃員が「撃て」を待つばかり。早いもの何の、何秒間の早業です。

次に「機関科三名、救急隊甲板に」の指令、甲板に出て見たら敵機が五機くらい上空で待機、一機ずつ降下機銃掃射。当艦は全速で走る。僚艦も輸送船も一斉射撃、負傷者も死者も相当数である。

我ら救急隊は二人一組で降下するグラマンの合間を見て、甲板を這うようにして負傷者の手足を引きずり医務室へ運ぶ。たちまち室いっぱい、通路までになる。重傷者は「水をくれ」と泣き叫ぶ、軍医が見て助からないと思うと「水をやれ」と一言。これで負傷者は楽になる。輸送船にも何人か戦死したとの報があり、ほとんど毎日の繰り返しである。主に敵機は輸送船が目標らしく集中攻撃です。

戦い済んで日が暮れたころ、戦死者の葬式となります、水葬です。艦長が一柱一柱の顔を見て、何か一言、二言涙流して「海征かば」です。このときの作業も私らの作業です。立会いの人たちも一言も話さず、明日の我が身を案じてか、しばし沈黙、明日の武運を祈る。そして夕食、我らは立ち食い、早食いの名人ばかり、何十秒で終わり、後片付けして部署に戻り、着のみ着

のままで居眠り。また、非番のときは兵員室でちよつと寝るが、少しの物音でも飛び起きたのも思い出の一つです。

朝起きて水の分配、一人一リットルです、船内では水は貴重品です。進行右の方に陸地が見えてきた。南支那海の真つ只中なので、海南島か旧インド支那（現在のベトナム）付近かと思つてみる。陸が懐かしい、毎日スコールで顔や体を洗つたものです。このころは敵機の襲来も少ない、最も昼は余り行動はとらず、夜になつて全速で行動。まるで夜行性の動物のようなものです。朝早く輸送船と別れ、身軽になつて帰路に着く。

毎日が地獄ばかりでもない。大変嬉しかったことも思い出のページです。海軍の進級日は当時五月一日と十一月一日と決まつている。我ら同期の者は十一月一日に進級できることになっているが、私一人が進級し上等機関兵を拝命。分隊事務室に貼り出され同僚から祝福を受け、間違いであつても楽しい思い出でした。気分良好日本晴れ、当艦隊は途中（海南島らしい）

で物資の供給を受けて何日か停泊。夕方出港し一路帰国の途に。地獄の一丁目の南支那海を無事通過。このころです、沖繩が占領され多くの艦船が撃沈と聞きました。当艦隊も無事帰国できるかと心配でしたが、どうにか我が基地広島県の柳井港に一度入港、そして傷だらけの船体で堂々と呉軍港に入港しました。

翌日、外出の許可をもらい何カ月ぶりの日本の土を踏む。望郷の念に引かれ、帰艦が遅れ制裁を受けたことも忘れることができない。

昭和十九年六月半ばころの夕方、「出港用意」の命令で準備に追われ、夜九時ころ出港。前回と同じコースで輸送船の護衛とのこと。今度は釜山からと佐世保から約五千トン級の船二隻、後にこの内一隻は途中で魚雷攻撃で沈没したとのこと、冥福を祈る。二回目の護衛なので場馴れしてか、沈着か横着か、毎日の日課を腹の内では笑つてできるほどで、上等兵風を吹かせたものです。

六月も末ころの夕方、「対空戦闘総員配置」と同時に敵機襲撃。次々と急降下機銃掃射と小型爆弾投下、

爆弾は二五キロ、我ら救急隊は這い回り、負傷者引きずり医務室へ送って、次の負傷者を救助しようとしたそのとき、後甲板近くの左舷に爆弾命中。艦は小破のようだったが、我ら五人は爆風で海中に吹き飛ばされた。

三人は浮流物に掴まり、もがいていたが艦は全速で航走、日は西に沈み薄暗くなってきた。一人の若者（水兵科）は足に相当負傷しており、二十分後に海に沈んだ。十七歳の同僚は泣き出す。私もこれで終わりかと半ば諦めており、夏の海でも三時間以上も海中では手足の感覚もなくなる。幸いに私は無傷、同僚は軽傷で浮流物を離さないように手首に縛って何度か駄目かと思つた。少しずつ意識がなくなつて夢のようになっていった。何時間経過したか分からないが、かすかに大発艇のエンジンの音で「助かった」と二人で嬉し泣きしました。

この大発艇に十人ほど救助された後、三時間くらい走って、たしか真夜中ごろ台北の近く（港の外）に投錨している貨物船（動かない廢船）に乗り換え、（ホ

テルと思つていた）二カ月くらい世話になりました。

台北港外のこの貨物船（約三千トン級）は、昭和十九年五月、この近海で機雷に触れて中破して航行不能となり投錨していたものです。私らが乗船したときは先客三十人（陸軍の兵隊十八人、この船の乗員十二人）と私らと同時に救助された海軍が十一人と記憶しています。この船でダブダブの船員用の服、日用品など支給を受けて、食事也十分とは言えないが満足、感謝しました。

この船には時折グラマン機の機銃掃射もありましたが、当船には何の武器も無い。船橋の陰に避難をしていたので損害もなかったが、空襲の度に八幡様に手を合わせて無事を念じ、無事帰国できることを祈るより仕方がなかつたのです。

海軍の下士官が私らの上司になり、規律正しい毎日でありました。毎日のように台北に出入港する艦船は数あるが、私の乗った駆逐艦や我が船隊の話や姿は更になし。撃沈されたものやら、掃港したものやら知るよしもないのです。

約二カ月くらい経ったところ、同僚が戦争が終わったらしいと話す。当然大勝利と信じて、故郷に帰ることばかりを考えて喜んでいたが、二、三日後敗戦との話に愕然として逃亡を企てる者も出る始末。どうなるものかと心配で気が狂いそうになる。どこでだれに聞いたものやら、日本の軍人は全部捕虜になる、日本の男性は去勢されるとか、流言に悩まされ、今考えると馬鹿気たことだが、私らも本気で逃亡を考えました。

十月、南支方面からの傷病兵輸送の船に便乗することができ、佐世保港、舞鶴軍港に到着、東舞鶴の行永海軍病院に収容され、十一月の寒い日に復員しました。

思えば十八歳で海軍志願兵として、厳しい訓練の連続を経て、駆逐艦の機関兵として、また空襲時の救護員とし、他人には話せないような修羅場を生き抜いてきました。沢山の輸送船が撃沈され何千何百の人たちが海の藻屑となっていくのをこの目で見ましたし、艦上で上官や同僚が銃爆撃で戦死しています。私も水中に飛ばされよくぞ生きて帰れたものです。

余りにも悲惨な戦闘、特に海上において、艦上にお

いて、また、漂流中において、多くを語れぬ諸々の体験を心に秘め、生と死、紙一重のぎりぎりの中で、生き残ったことに神仏に手を合わせ感謝し、また、亡き戦友の冥福と、このような戦争が二度と起こらぬことを祈っています。

## 【解 説】

―海上護衛駆逐艦勤務 奇跡的な生還―

昭和二十年三月、硫黄島失陥により、同島からの米陸上機の脅威、四月の米軍の沖繩進攻により、内地―台湾、沖繩航路も途絶し、このため南方航路による交通は完全に終わった。そのため、我が海上交通路は日満支航路と日本海諸港間の航路を残すだけになってしまった。体験記執筆者・菊池氏は転勤命令により呉軍港停泊中の駆逐艦に乗り込んだ。

海上護衛の船舶の喪失量は、船舶運営会資料によれば、潜水艦による雷撃は二十年一月―八月まで、一四五隻、約七四・六千トン、航空機による雷撃は、二十年一月―八月、三四四隻、約八〇・三千トンである。

海上護衛は対潜水艦、対航空機であるが、右のごとく船舶の喪失隻数は、航空機による雷撃被害が潜水艦雷撃被害の二倍になっている。これは、マリアナ諸島欠陥、フィリピン欠陥、硫黄島、沖繩と対日包囲網が圧縮され、それらを基地として爆撃機のみならず、艦上機またはP51のごとき陸上戦闘機が、我が船団のみならず海軍艦艇に対しても攻撃を加えるようになり、またこれを迎撃する我が航空基地も逐次封鎖され、海上護衛が全く無防備になったためである。

昭和二十年一月～三月の状況

昭和二十年一月一日付で九〇一空、九三六空を第一護衛艦隊に編入、九三一空を九〇一空司令官の指揮下に入れ、在台湾九〇一空航空兵力を大分仏印、海南島、南支那方面に移動集中した。三月に入ると沖繩進攻、本土空襲の激化により、船舶運航海面はますます縮減され、一方、敵機動部隊等の跳梁のため護衛作戦はますます困難となった。四月～六月になると、南方航路は終焉し、主要航路は前述のごとく日本海方面に圧縮され、これに伴う護衛航空戦もこの方面へと圧縮され

た。

海軍艦艇は、米軍の機雷投下により日本近海に封鎖されたため掃海を主任務とするようになった。また、船団護衛もようやく建造された海防艦及び新駆逐艦（T型）を使用するようになった。

なお米国においては、一九四三年（昭和十八年）二月から護衛駆逐艦の大量生産を開始し、十二月五日までに二六〇隻を就役（日米の差は歴然であるが、鋼材も工作機械不足のためディーゼル機関に変更）させた。我が国では、海防艦のほかに旧式駆逐艦及び水雷艇、駆潜艇、特設船舶が使用された。

体験記執筆者・菊地氏は、当時としては最大戦力と聞かされた第〇〇駆逐隊（駆逐艦四隻―一千トン以上）に編入され、海上護衛に任じていたという。

決戦兵力である艦隊型駆逐艦は、艦隊自体の対潜警戒並びに護衛のほか、一部特別の場合を除き、原則として船舶の護衛には使用したくないというのが連合艦隊の方針であった。それなのに、全戦争期間を通じて護衛艦艇不足に悩んできた我が海軍が、艦隊型駆逐艦

をなぜ積極的に船団護衛に使用しなかったのか、即ち、大型駆逐艦をなぜ船団護衛に使わなかったのかということである。

総括的には、大型駆逐艦の対潜方策よりは、高速運動によって攻撃攪乱や回避の方が上策である。高速を必要とする艦隊の対潜直衛等には是非とも必要であるが、これを船団護衛に使うにはあまりにももったいない。虎の子部隊を船団護衛に回すのは得策でないというのである。昭和十九年前半まで、連合艦隊所属の駆逐艦は全部大型のものばかりで、十九年後半から、菊地氏の乗った駆逐艦が竣工したのである。したがって、今までなかった新型駆逐艦が海上護衛に使われるようになった。これは海防艦の建造にもいわれるごとく、重要な商船等の海上護衛重視が遅きに失したのである。